安積二小だより

創立150周年　「花と緑と思いやり　ひとみ輝く　二小の子」

郡山市立安積第二小学校
学 校 便 り　No.１０
令和７年　６月１３日
文責：校長 齋 藤 和 彦

◆◇ 校長室より ◇◆

学校は“子どもの学びの場”です

進級して早..,夏休みまで,あと１ヶ月です。
担任の先生には,学級の子ども達の“らしさ(素)”も見えてきました。よい事にも困り事にも,学校.学級生活の中に,子どもらしさが表れてきます。
子どもだからあたり前です。(これも学びの場です)

■ 全国的傾向の状況をもとに,ご批判あることも覚悟の上で,一緒に考えていただけたらと..掲載します。

昨今,子ども間のトラブル解決に担任が苦慮しそこに労力の大半を費やすことによって,本来の担任業務に専念できない状況が増えています。
これは,全国的な傾向です。・・なぜでしょう？
その背景の一つに,教員の保護者への説明責任が重くなったことがあると言われています。
例えば,子ども同士のケンカの場合,保護者からその状況や解決の経緯の詳細説明を求められることが増えています。そのケンカを把握していなかった場合や直接見ていなかった場合は,その理由まで求められます。(保護者が納得するまで..)
～こうなると,事の中核が,子どもの問題から保護者対応へと転化されてしまいます。(肝心の子どもはポカン..)
二つ目には,当事者である子どもの痛み（しんどさ）を保護者が自分の痛み（しんどさ）に感じ,保護者が相手や学校を許せなくなることです。
「ごめんね」「いいよ」。子ども同士が納得した後にも“このしんどさを何とかしろ！”とばかりに,保護者の再納得..保護者同士の関係修復まで担任(学校)を介すことを求められることです。

親御さんが我が子を大切に思うことは当然のことです。子ども達は,多様な生育環境・親の価値観のもとで,それぞれの育ちを尊重されて育っています。そのような３０人の個性がひとつ教室に集えば,何かしら行き違いやトラブルが生じることは当然です。(途上の子どもなのですから)
学校では,このような子どもにとっての困りごとは,成長（経験から得る）チャンスと捉えます。
担任（学校）は,『厳しさとあたたかさ』『即決と熟慮』『情熱と冷静さ』を尽くして,このトラブル解決にあたります。(この子の成長のためにです)

今は,子どもが経験すべき（学ぶべき）チャンスを「あなたは悪くない」「あなたはいい子」とばかりに,親が代行してしまうということが増えてきているのです。

仮に..“くつかくし事件”が起きたとします。
自分の姿は見せず,相手にダメージを与えて..その困った様子を影で薄ら笑って見ている陰湿な行為..だとしたら,もちろん許せませんね。

“くつかくし”があった時,私の子どもの頃の先生は,烈火のごとく怒りました。授業も何もそっちのけで！
それはそれは怖かったことを覚えています。
先生は『人としてダメなことはダメ！』これをストレートに教えてくださったと思っています。

今は,「先生の聞き取り方（解決手順）に納得がいかない」「やったのは,我が子だけではない」等々,保護者の言い分に「何？」とも感じる難題化の要因が混在します。(もうこうなると,担任の手に負えません。学校体制で対応させていただきます。)
“くつかくし事件”の場合,様々な背景を見てきましたが,●相互トラブル問題の仕返し/不納得。
●友達へのライバル視/羨ましい境遇への抵抗。
●“私をもっと見て！”と自己主張アピール。
●連日の塾や習い事..我慢/抑圧ストレス発散。
等々がありました。(それでもやってはダメ！です)
この“くつかくし事件”解決には,やった者を探して謝罪（反省）させれば済むものばかりではありません。(子どもの心は奥深く..繊細です)
～上記の●を軽くしてあげない限り,何かしらの抵抗行為（時として靴隠し）は止みません。
保護者の方から,「犯人を捜して謝罪させないと納得できない。(親の謝罪も)」と言われることもありますが,誰がやったか不明の時もあります。「わからないなんて,学校は何をやってるんだ！」と言われますが,どうしようもありません。
先日,ある親さんが,「子どものケンカは,子ども同士に解決させる経験が大事！」と。(大賛成)

～こんなこともありました。(私の担任時代)
下校時に外ばき不明事件です。(くつかくし？)
昇降口は大騒ぎ。「先生！〇ちゃんの靴がない！」「〇ちゃん帰れないから,見つかるまでみんなでさがそう！」みんなであちこち探し始めました。
〇くんは,一直線に校門外の文房具屋さん脇の電話ボックス下から靴を見つけてきました。
「先生！ありました！」～どうして電話ボックスってわかったの？(皆の心の声は封印したまま..)
「〇くん,ありがとう」と言うと,「給食のときに隠したくなって隠しました」本人も自分でもわからない気持ちでやってしまったのでした。
〇くんの境遇や〇ちゃんを羨ましがる気持ちをわかろうとしても,担任の私は〇くんの靴隠しに至るまでの“本当のつらさ（悲しさ）”はわかっていなかったと思っています。

それでも私達は,“その子の成長経験にとって最善の方法”でトラブル解決に向かいます。